

清水一行
恥女連盟

ぼるのどいこう
10



ケイブンシャ文庫

ケイブンシャ文庫 181

ち じょれんめい
恥女連盟

昭和62年4月15日 第1刷

著 者 清水一行

発行者 加納将光

発行所 株式会社 勁 文 社

〒164 東京都中野区本町3-32-15

電話 東京 (372)5021 (編集)

(372)3291 (営業)

振替 東京9-13311

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 明興製本工業株式会社

——定価はカバーに表示してあります——

著者と了解のうえ検印を廃します。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)



聡女連盟

清水 一行

ケイブンシャ文庫

勁文社

目次

子種葬儀料	六
さわらせ感度	四五
いくやいかずや	八三
トラ刈り封じ	二三八
あら、またなの	二六八
おとこがらみ	二〇六
日本チン別	二四九

恥女連盟

子種葬儀料

一

二日も降りつづいていた雨が、ふっとローソクの火を吹き消すように上がり、いつやんだのだろうかと気づいたときは、低い雨雲が俄かに切れ、一転して初夏のまぶしい陽光が濡れた舗道を燃え立たせた。

こうなると、いきなり蒸し風呂へでも放りこまれたような、べたつく汗が肌を這う不快感に、誰もが顔をしかめたくなる。

六月中旬の梅雨どきにありがちな、気紛れ天気だった。

「なによその恰好」

慌ててショーウィンドーに、日除けのテントを下ろしてきた文子が、思いきり下肢を開いているあかねを見て笑った。

「洋装店チ・チ」は五坪足らずの店で、その入口から突当たりの正面、小さな椅子に浅く掛

けていたあかねが、ミニスカートの裾を太腿のつけ根までまくり上げ、薄もののピンク色のパンティを、路地の通りへむき出しにしながら、所在なげに女性週刊誌のページをめくっていたのだ。

「客寄せよ」

「え？」

「眼につくでしょう。そうすればあたしのパンティに魅せられて、フラフラっと入ってくるお客だっているわよ」

「ばかね」

「サービス時代じゃないの」

「うちはね、婦人服専門店なのよ。大股開きの女性が店の正面に坐っていたら、入りかけたお客さんがびっくりして逃げちゃうじゃないのよ」

「そうかしら」

首をかしげて、しかしあかねは一向に下肢を合わせようとはしなかった。

「あかねったら」

「でも暑いわ」

「なにもかも、透けて見えちゃうわよ」

「でもむれちゃうのさ、あたし昨夜お風呂へ入らなかったから、ベタベタして気持ち悪いの

よ」

「そんな臭いの、余計困るわ」

「あら言ったわね、あたしの臭くなんかないわよ」

あかねはいきなり自分の部分に指を押しつけ、その指を鼻先へ持ち上げて嗅いでみた。

「ほら、人に見られる」

「かまわないけど、あたし自分で触ったら、なんか気が起きちゃったわ」

言いながら、あかねは再びパンティの上へ指を押し当て、文子に笑いかけながら、ぐりつと指先を回転させた。

「不快指数が増えちゃう」

「こっちは快感指数上昇よ」

言つてのけるあかねの足許へ、文子は扇風機を下ろしてやった。股火鉢ならぬ股扇風機だった。

川崎文子、二十三歳。

本業は駆け出しのファッション・デザイナーで、しかもちろん自分のデザインで喰べてゆけるほどの実績もまだなく、洋装店チ・チの百人町支店を委まかされ、店の切盛りをしながら、デザインの勉強をしているのだった。洋装店チ・チは、文子の恩師筋に当たる有名デザイナーが経営する一連のチェーン組織になっていて、百人町支店は、大久保通りの中央線大久保

駅と山手線新大久保駅の間にはさまれた、デルタ風な一角。その大久保通りから路地一つ入った百人町ビルの一階外れの隅にあった。

生まれは静岡県三島。

そのせいかどうか、色白瘦身、小柄な女っぽい美人だった。

三島……の生まれだから女っぽい色白美人だという風土的な理由があるわけではなく、昔から、三島女は情が深いという、唄にまで歌われたつまりはそういった漠然としたイメージがあるに過ぎず、髪はセミロングに、彫りの深い顔立ちで一見知性派とみえる文子自身は、そこは現代女性らしくチャッカリと、割切った人生観を持っていて、不特定多数のセックスフレンドと、適当に愉しんでいるくらいだった。

一方の眉川あかねは二十二歳。

代々木モデルクラブ所属の、ヌードもへっちゃらという、アタック派モデル。

もっともあかねの場合は、一五五センチの身長ながら、九十八センチという並外れたバストの所有者で、その持って生まれた豊かなボディライン以外には、格別プロポーションがいないというわけではなく、また美貌……ともいえなかったから、モデルとしてはこれといった決め手がなかった。行きつくところ、豊満ともいえる胸の隆起をむき出しにすることが、あかねにとってはモデルをつづけてゆく上での、唯一無二の、切り札だったといっている。

事実、二年前にあかねが売り出したのは、滋賀県は琵琶湖畔での、九十八センチのバスト

で広い湖水を覆い隠すアングルで撮った写真に「琵琶湖の水が溢れまアす」というリードをつけた、週刊誌のグラビアからであった。

一年ほどは、九十八センチのバストが売れに売れた。

男性週刊誌はもとより、女性週刊誌、漫画週刊誌、はては月刊誌からグラフ雑誌と彼女は引っぱりだこで、その張りのある大きく宇宙の空間にせり出した乳房が、各種グラビアの誌面に氾濫したくらいであった。

四国は徳島の出身。

阿波踊りこそ踊らないが、小麦色の肌をした陽性な行動派。

興至れば、一晚に四人まではオトコを梯子はしごするといった、当然、かなりハードと思われるスケジュールを平然と消化するバイタリティに溢れていた。

たまたまこの百人町とは眼と鼻の先、西大久保三丁目の六畳一間のアパートに住んでいたから、洋装店チ・チへ出入りしているうちに、あかねとはあらゆる点で外見の違う文子に、しかしどこか似た者同志といった行動面の親しさを感じ、意気投合してしまったのだった。

股扇風機で、べたつき、多分むれているに違いないスカートの中へ風を呼び込み、ご機嫌に週刊誌のページをめくっていたあかねが、不意に奇声をあげて扇風機をひっくり返してしまった。

「なによこれ！」

椅子からも転げ落ちそうになり、あかねはやっと腰を納め直した。

「どうしたっていうの」

顔をしかめた文子が、扇風機を立て直す。

「これよ、みて」

あかねが、開いていた週刊誌のグラビアページを拵げたまま、ショーケースの上へ投げるように置いた。

「あら、テレビタレントの郷新一じゃない」

「二ページ前のタイトルを見てよ」

「タイトル？」

「そう」

「華麗なる愛の素顔——妻こそすべて」

「いけ図々しいわ」

「別になってもいいと思うけど」

「あの男、あたしとやったのよ」

「あら、あかねと？」

「不思議そうな顔しないでよ」

「口説かれて」

「あたしだって口説かれるのよ」

「そうなの」

「なにその言い方」

「ううん、でも、頭にくるほどのことはないと思うわ」

「そりゃあね、わたしは結婚以来、一度も浮気をしたことがないし、これからも永遠に妻を裏切らないだろうなんて、そんなこと言わなけりゃ怒らないわよ」

「ほんと、書いてあるわ」

「あたしとやったのは、じゃ浮気じゃないっていうの」

「わたしに怒らないでよ」

「だってそうじゃないの、ここに出ている奥さんのことさんざんきおろして、そしてあたしを口説いたのよ」

「あら、案外ね」

「男としたら最低よ」

「でも、あかねそれに乗っちゃったんでしょ」

「そういうことじゃないわよ、そんなにあたしとやりたいなら、やらせてやってもいいなって思っただけよ」

「で、どうだった郷新一って」

「タフガイだなんて見掛け倒しよ」

「もっと詳しく話してよ」

「あんたも好きねエ、文子」

「あかねはテレビの見過ぎよ」

「ちょっとだけヨっていう、あれ？」

「なんでもいいからさ」

「テレビのさ、あたしの出ている深夜番組、あの帰りに送って行ってやるって車に乗せられたのよ」

「じゃ、カーセックス」

「あわてないで。モーターヘルへ行っただの」

「なんだ。わたしならカーセックスのほうがいいな」

「あんなのせわしなくて」

「それから」

「なかなか立たないのよ。ぼくはフェラチオしてもらわないとソノ気にならないんだなんて言っただけ」

「してやったの」

「しょうがないわ」

「で、立った」

「立ったけどあつという間よ。ごめんよ、でもキミは最高だなんて」

「じゃ全然じゃない」

「誇大広告」

「中身が違うってわけね」

女っぽい知性派川崎文子も、こういう話になるとたちまちあけすけな眉川あかねと同じ次元の、好奇心強きただの女……の次元に落ちてしまう。それがあかねと結局は意気投合する共通の土壌でもあった。

「あら！」

こんどは文子が奇声を発した。

「なに、どうしたの」

「この写真、ユリ子が撮ったのよ」

「えっ、ユリ子が」

「ほら、グラビアの最後に、カメラ落合ユリ子って書いてあるじゃないの」

「ユリ子だわ」

「どうする」

「でも、まさかユリ子……」

「そりゃあ、あかねみたいなのはなかったかも知れないけど、でもわからないわよ。男みたいなヘンな恰好してカメラバッグ担いで歩いているけど、あのこ、とってもオトコに惚れっぽいんだから」

文子の言葉で、二人はなんということもなく顔を見合わせた。

落合ユリ子、二十四歳。

フリーの女性カメラマンで、女だてらに戦争写真の傑作をものにして、一躍人気カメラマンにのし上がることを夢みて、二年前にはベトナムの戦場へ飛んだというくらい、向こうみずなところがある。しかしやっと前線への従軍を許されたところまでは上々の首尾だったのだが、女の生理的な不便さが、彼女の場合は致命傷になった。

なにしろ男なら、ちょっと立ちションということですますことのできる、小のほうの生理的要求も、女……の身ではそうもゆかない。

耐えに耐え、しかしとうとうガマンできなくなったユリ子は、解放戦線軍と正面から対峙している戦闘のさなかで、一人、すたすたと林の中へ駆けこんだのである。ズボンを脱ぎ、パンティを下ろしていざ……。

ところが、女性の排泄には、キシューというかなりの音をともなうもので、眼を細め、一心に放出しているさなか、近くに潜んでいた解放軍兵士に怪しまれ、白い臀部目がけての狙撃をくらったのだった。